

リレー随筆

ゾンビ映画の魅力

鹿児島大学病院

高附 佳秀

皆さんはゾンビといつたら歩くゾンビと走るゾンビ、どちらが好きですか？私は歩くゾンビです！

はじめまして、池満先生からリレーのバトンを受け取り今回執筆させていただくことになった高附といいます。桜島プログラムのもと臨床研修を行い、いよいよ2年目がスタートするというタイミングで今回のお話を頂きました。良い機会だと思いリレーに参加させていただしたことになりましたが、いざなにか書いてみるとなると存外に題材が浮かびません。研修1年目の出来事を書くにしてはパンチが弱く、私の生い立ちを書くにしては6000字以内という制限がなかなかに厳しい。かと言って自分の趣味について書くにしては話を膨らませられるほどのものを持ち合わせていな…ゾンビ映画があるじゃない！ということで、今回はゾンビ映画の魅力を私の主觀と独斷と偏見のもとお話させていただきたいと思います。果たしてどこに需要があるのかは甚だ疑問ではありますが、これからゾンビ映画に触れるかもしれない方へ少しでも助けになればという気持ちでその魅力をお伝えしようと思います。ゾンビが好きという方がこれを読むことがあればこんな意見もあるのだなあ、と温かい気持ちで見ていただければ幸いです。なによりも、これをきっかけにゾンビ作品に興味を持っていただければ嬉しく思います。なにぶん拙い文章であり、趣味のこと故に碎けた言葉を使ってしまうこともありますが、お付き合いいただけますと幸いです。

その前に簡単な自己紹介

いきなり話の腰を折ってしまいますがゾンビの魅力を話す前にまずは私の为人について

簡単に説明させていただきます。名前は高附佳秀、出身大学は鹿児島大学ですが生まれた場所は山口県、父の転勤に連れて新潟、埼玉、長崎等を転々と移動した後、高校生になる頃に福岡県北九州市に夢のマイホームが購入されてやっと腰を落ち着けることができました。幼少期は一つの場所に2年と居ない生活が多く、小学校に関しては転校を3回繰り返しました。幸いにも転校先の学校はどこも良い環境でしたので寂しい思いをすることは少なかったですが、子供ながらにコロコロと切り替わる環境に適応することに必死だったことを覚えています。そのような環境のお陰か、手前味噌ではありますが人を見る目はずいぶんと養われ人間觀察力に関しては同世代の中で抜きん出ている自負がありました。一方でその経験によって得た処世術は“周りに合わせてもらうこと”であったため、自分から人の輪に積極的にいるといった行動を起こすことが苦手で苦労することもありました。他人の顔色を窺うことはしないのに、中途半端に人様の気持ちばかりは敏感に感じ取ることができたせいで未知のコミュニティに入ることが億劫になっていたのかもしれません。そのせいで中学生の頃は転校先に馴染めず孤立するという経験もありましたが、それを通してより一層自分の人間觀察力は精度が上がったので振り返れば良い出来事の一つだったのではないかと思っています（もちろん、幸福な思い出ではありませんが）。

この中学生の頃は私にとって良い思い出ではありませんでしたが、同時に人生における大きなターニングポイントとなりました。転校が多くとも友人に囲まれていた小学生時代とは対照的に、どこにも居場所がなく孤独を

感じる日々を過ごすこととなった私はその寂しさを解消するためにアニメに没頭するようになりました。その後、高校進学を機に幸いにも友人に囲まれる充実した生活を再び送ることができるようになりましたが、自分が存外に凝り性だった故かアニメ趣味は継続していました。

で、映画（ゾンビ含む）に出会ったってわけ

高校生まではアニメ鑑賞に精を出していた私でしたが、大学入学とともにバイト・部活・勉強とそれなりに忙しい日々を過ごすようになると体力・時間的にアニメを見る頻度が減っていきました。特に大学2年生の頃に始まった解剖の授業は、朝から晩まで解剖室に缶詰にされる環境だったこともあり、その時期にはかつて程アニメを見る時間を確保することができなくなっていました（テレビ放送されているアニメ作品は1作観るのに5-6時間くらい拘束されてしまいますからね！）。しかしながら人間はなにかしらの発散方法を持っていなければどこかでばたんきゅーしてしまう儚い生き物。せめて代替に、とアニメ映画作品をビデオレンタルショップで借りてきて観るという生活が始まりました。それまでの私は専らテレビで放送されているアニメ作品ばかりを見ていたので、スタジオジブリを代表とするアニメ映画を、腰を据えて観たことが殆どありませんでした。するとどうでしょう、たかだか120分の中に緻密なストーリー、迫力のある作画、躍動感あふれる背景曲といったあらゆる芸術が波のように私を攫っていきました。子供の頃に観たことがあった作品も（中学生の頃からアニメ鑑賞に没頭していたおかげか）、当時とはまた違った視点で鑑賞できるようになっており改めてその完成度の高さに驚きました。この経験に味をしめた私はビデオショップの棚にあるアニメ映画作品を片っ端から借りては観るようになりました。しかしながら、残念なことに

名作と呼ばれる作品は星の数ほどではなく、半年もするとその店舗の気になるアニメ映画はほぼ全て見切ってしまいました。幸いなことにその頃は私の興味は映画（アニメ）から映画全般へと移っていたため、非アニメ作品にも手を伸ばすようになっていました。例えばアクション映画、SF、サメ、そしてついに手に取ったのがホラー、その中でもより詳細に分類するならばゾンビ映画を手に取ることになったのです。

ゾンビ映画の魅力

さて、前フリが幾分長くなってしましましたがここからはゾンビのことだけを話していきます。なぜなら今回はゾンビ映画の魅力をお伝えする原稿だからです。

まず、ゾンビ映画とはどのような映画かということを先に定義づけておくと、答えは至ってシンプルで【ゾンビが出ている映画】です。けれど、ただ出ているだけではいけません。妖怪大集合みたいにゾンビ“も”出ているだけならば、それはゾンビ映画ではなく妖怪映画になってしまいますからね。ですからより正確に定義づけをするならば、【ゾンビがメインのクリーチャーであること】です。ゾンビがその作品におけるギミックの主軸であると言い換えてもいいでしょう。ですがそもそもゾンビってなに？という方もいらっしゃるかもしれません。そしてその答えは案外シンプルではありません。一般にゾンビといえば歩行可能な腐った死体で、ゾンビに噛まれた人もまたゾンビになってしまうというイメージがあるかもしれません。これはある一面においては正解なのですがこと映画のゾンビに関していえば全てがそうではないのです。呪術によって蘇った死体がゾンビとして登場する作品もありますが、薬によって死体が不完全に蘇生してしまって生まれるゾンビもいますし、ゾンビウイルスに感染して生者がゾンビになってしまうという作品もあります。そもそもなぜ、その作品でゾンビが

出現したのか説明しないこともあります。唯一共通するのは正常な生きた人間を襲う、その一点だけです。そう、ここすでにゾンビの魅力が一つ出てきましたね。ゾンビは自由なのです！腐っているゾンビもいれば、腐っていないゾンビもいる、噛みつきで人を襲うゾンビもいれば、脳のリミッターが外れたことによる圧倒的な怪力で人体をバラバラにするゾンビもいます。大抵のゾンビは噛めば仲間を増やしますが、そもそも喰い散らかすだけ喰い散らかして仲間を増やさないようなタイプだっています。動きが緩慢でノロノロしたやつも、アグレッシブに走って棒高跳びをするゾンビも存在します。やばい、ゾンビ自由すぎる！ゾンビ映画の魅力の一つはこの多彩な個性を許容してくれる下地があるところです。すなわち、観る映画毎にあらゆるキャラクター性のゾンビが出現するため、飽きがきにくいのです。私が好きなゾンビ作品に『REC/ レック（原題：[Rec]，監督：Jaume Balagueró, 2007年公開）』と『バタリアン（原題：The Return of the Living Dead, 監督：Daniel Thomas O'Bannon, 1985年公開）』という作品があります。詳細は伏せますが前者のゾンビは感染が契機になるのに対して、後者のゾンビは死人が蘇る薬が墓地で散布されたことによって発生します。しかも前者は感染を目的に人を襲うのに対し、後者は食事が目的で人を襲うのです。更に前者は恐怖感を全面に押し出したゾンビであるのに対し、後者はコメディックなゾンビが多数登場するのです。このように同じゾンビ映画というジャンルでも登場するゾンビは毛色が異なり、しかしながらいずれも没個性的ではなくキャラクターの立ったゾンビとなっているのです。ちなみにこの両者はどちらも走ります。

そして登場するゾンビが異なれば、作品の雰囲気も大きく変わってきます。恐怖の対象としてのゾンビが描かれる作品であれば内容はシリアルスになるのに対し、噛まれると厄介だけど対処法は知られているようなゾンビが

登場する作品であればギャグティストの作品になります。2つ目のゾンビ映画の魅力が見つかりました。作品によってガラッと雰囲気が変わるので！なんなら、同じ作風のものは2つとないといってもいいかもしれません。ひたすらゾンビから逃げる作品もあれば、ショッピングモールに籠城する作品もあり、ともすればゾンビの頭にレコードを突き刺してその場を凌ぐような愉快な展開の作品もあります。ゾンビの自由度が高いなら、その内容の自由度も非常に高いのがゾンビ映画の魅力です。先に挙げた『REC/ レック』は閉じ込められた屋敷の中でゾンビが襲ってくる展開で本格的なホラーです。対して『ゾンビランド（原題：Zombieland, 監督：Ruben Fleischer, 2009年公開）』はゾンビが闊歩する街中を逞しく生きていき、時にはそれを轢いたりするようなギャグ要素が鏤りばめられた作品です。幅広い需要に対して応えることができるのも、ゾンビ映画の魅力的な点の一つといえます。

続・ゾンビ映画の魅力

とはいって、上記のような幅広い作風を内包したジャンルという観点だけであれば、他ジャンルにおいてもいえることではあります。ではなぜここまで私がゾンビ映画を推すのかといえば、それはゾンビ映画でしか表現することができないものがあるからです。私がゾンビ映画と出会った件ではそのジャンルをホラーとしていましたが、ゾンビ映画はその中でもパニックホラーに分類されることが多い作品群です。突如として現れた驚異に、人々がどのような反応をするのかを主眼にした作品が多く見られます。これこそが、ゾンビ映画の真骨頂だと私は考えています。

ところで人の性格って一言で言い表すことはできませんよね。普段は穏やかな人でもお酒を飲んだら凶暴になったり、看護師さんには高圧的なのに医師の前ではおとなしい患者さんだったり、おっとりしていると思ったら

救急外来でテキパキと指示を出している先生なんかも。多少の指向性はあれ、時や場面、その日の気分や相手にしている人物との関係性で表に出てくる顔というのは、大なり小なり変化があります。いくつも垣間見える性格は、その全てが本物でありその人を構成する要素だと思ってはいますが、それでも尚どれか一つが本物であるとするならば、果たしてその顔はどのようなときに出てくるのでしょうか。この質問の正解は、結局のところ人による、というものになってしまいますが、私は“生命が脅かされ心に余裕がない場面に直面したときが、その人の本当の姿が暴かれるときである”と思っています。現実世界でそのような場面に出くわすことは滅多にないと思います。もしかしたら、一生経験することはないかもしれません。それでも、作り物の世界であればそれを観ることができます。それこそがゾンビ映画の舞台であり、脚本であり、登場人物たちなのです。死の象徴であるゾンビが迫ってくる中で、各々の登場人物たちが見せる行動はどれもが自身に対して正直です。保身に走る者、友人を盾にしてでもしぶとく生き残ろうとする者、愛する人のために勇敢に立ち向かう者、そのどれもが本物であると思わせる迫力で作中描かれます。絶望して自ら命を絶ってしまう者もいますし、一方で死を受け入れながらも尚、自らではその選択ができないような人物も登場します。けれど彼らが最後までそうであり続けるかはわかりません。始めはいけ好かなかった奴が、仲間との生存生活を通じて協力する姿勢を見せてくれることもあります。臆病でなにもできなかった主人公が、最後には自己犠牲の心を奮い立たせるようになることもあります。反対に、どんどんと希望を見失って、最後には自暴自棄になってしまうような人物になってしまいますことだってあります。多くのゾンビに囲まれ、数少ない生存者コミュニティの中で人間がどのように本性を表し、変化し、関係を結んでいくのかが濃厚に描かれます。こ

のヒューマンドラマこそがゾンビ映画の本質であり、魅力なのです。なによりもその根底には人間讃歌があり、作品を見た人々に人間の醜さと素晴らしさを思い起こさせてくれる、そんな力があります。

人間觀察力に自負がある私が、人の本性を暴きその変化を描くゾンビ作品を好ましく思うのはある意味当然の帰結であったかもしれません。けれど、このゾンビ作品群が訴えるメッセージは、きっと万人にとって興味深いものであると思っています。

最後に

ひとまず、ゾンビ映画の魅力についてお伝えすることができましたので私は今とても満足しています。満足がてら最後に私の一番好きなゾンビ映画の紹介をさせてください。

『28日後（原題：28 Days Later, 監督：Danny Boyle, 2002年公開）』。ゾンビウイルスの感染によってゴーストタウンとなってしまったロンドンから始まるこの作品は、ゾンビから逃げ回るサバイバル生活でありながら、牧歌的雰囲気で描かれる前半と醜い人間性が全面に押し出される陰鬱な雰囲気の後半で構成されています。上映時間は114分とゾンビ映画にしてはやや長いものではありますが、前後編で大きく変わる作風と小気味良い話のテンポのお陰で中だるみを感じることは少しもありません。先に述べたゾンビ映画の魅力がギュッと詰まっているながら、情報量は必要最低限、観ていて疲れず、作品が終わったときには少しだけ世界の景色が変わって見えるかもしれない、そんな作品となっています。

ゾンビ初心者の方にこそ、この映画を観ていただければと思いながら今回のお話を締めさせていただこうと思います。稚拙な文章ではありましたが最後まで読んでいただきありがとうございました。

次号は、鹿児島大学病院 白石ゆり先生のご執筆です。
(編集委員会)